

して讀まれて「衆人が皆焼け死んで云々」の意味に取られて漢文の意義通じ難いやうに思はれる。然るに延寶四年板の法華經科註には

我が淨土は毀れざるに而も衆は燒盡すと見る。憂怖諸の苦惱是の如き悉く充滿せり。

とある此の方は語理相通じ耳に入りて意義覺り易きやうに考へられる。我々俗人の眼よりすると斯る無理なる點がわからぬのである。何れの宗門を問はず義門師の趣旨を體認せられて、語法訓點等に就ても十分に留意研究せられたいものである。

終に一言すべきは義門師の著書數々ある中に

友鏡底廻影

は彼の詳細なる赤堀氏の語學書解題にも未見として臆測の説明を下してあるが、先年堺市の老醫大槻季夫氏より小田清雄の手澤本といはるゝ友鏡底廻影を貸與せられたから、畏夫正宗敦夫君に示したるに、此の書は小濱の東條氏の方にも已に原本

燒失せる由なればとて之を謄寫せられて他日義門全集印行の材料にしたいと申越された。

(大正九、三、十四夜)

語辭林香記を繙きつゝ

橋川 正

東條義門師一代の行蹟は、大島那賀氏の義門師略年譜(明治三十七年十月發行)『心の花』七ノ八)を見れば一目の中に見らるゝのみならず、松見半十郎氏の『義門法師』(若州偉人傳第一編)は唯一公刊の傳記として、坐右の好參考に供することが出来るのである。而して氏の義門傳史料は、現に小濱妙立寺に藏する嗣子逢傳稿の先考義門略傳妙立寺歴世圖譜、同系譜及び菊池三谿筆の義門傳などから多く得られたものらしく思はれるのであるが、これらの史料は何れも義門傳を研究するに當つて

は、是非一覽せねばならぬものである。更に手近かなものを舉げるならば大日本人名辭書、佛家人名辭書、日本百科大辭典第三卷等に指を屈するこゝとが出来る。佛家人名辭書は言語學雜誌(一ノ五、明治三十三年六月發行)に掲載された東條義門傳及參考史料に負ふ所が多いらしく思はれ、日本百科大辭典の方は高木尙介氏の執筆で、義門の一生が甚だよくスケッチされてゐる。その他のことは一切略して、義門の講述を筆記した語辭林香記一卷について、繙きながら思ひ當る節々を書きつけて見やう。

それに前だつて眞宗全書、眞宗大系にこれまで收められた講録を舉げると、眞宗全書では

尊號眞像銘文講說二卷

(大正三年六月刊行)

改邪鈔遠測一卷

唯信鈔講說二卷

(大正三年十二月刊行)

眞宗聖教和語說

五卷

(大正四年七月刊行)

末代無智御文和語說一卷

眞宗大系では

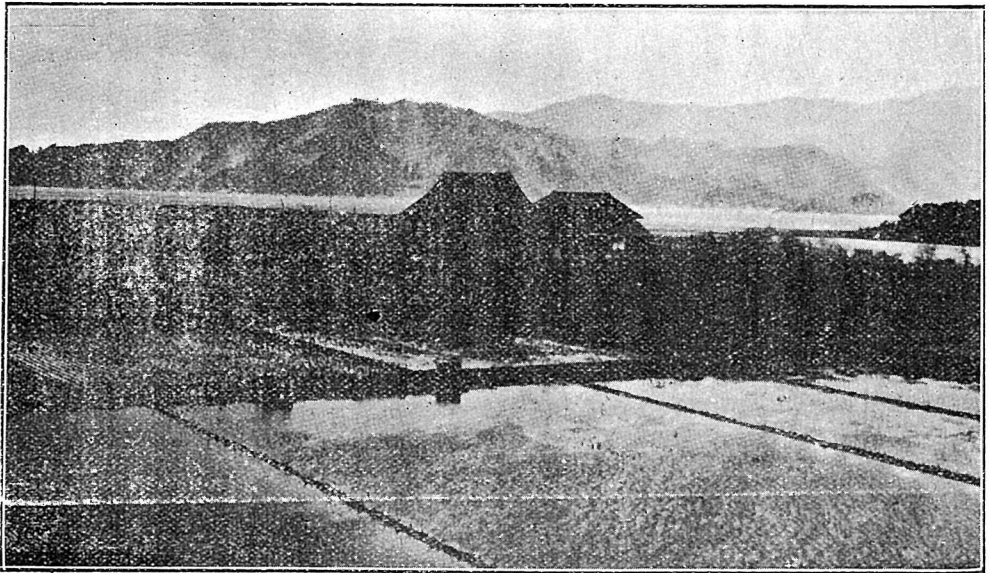
御文一帖目第十五通講義一卷 (大正七年八月刊行)

の六部十二卷である。宗學に關する著述は未だこの他にもあるが、これだけのものを見て師の學術的根柢がどこにあつたか、充分窺はれるのであつて、師は國語を科學的に研究して聖教の眞意を發揮し、非科學的な解釋を排擠せんとするにあつたことは明かである。五十八年の師の生涯は決して長くはなかつた、師は病身なるにもかゝらず、常に衛生に心を寄せ藥餌に親しみ、落命の時に及ぶまで書物を手から離さなかつた。師の研究の精細周密にして、學に忠實であつたことは吾々の敬慕に堪へないところである。師は飛檐以上の堂班に進まず、寮司をさへ辭退して、あまり豊かならぬ家計を舉げて典籍の蒐集費に充て、終生讀

書と研究を怠らなかつたのである。師は今日まで大谷派學事史の上に於て餘り注意されず、却つて國語音韻の研究者として世に知られて居るが、これでは師の素志に戻つて居ないであらうか。

師の研究は宗學にあつたので、宗學の上から聖教を解釋するに當つて、國語を科學的に研究せねばならぬ必要を感じ、國語の研究に没頭されたのであつて、宗學が本であり、國語學は末である。吾々は師の素志の存する

語辭林香記を繙きつ、



小 濱 の 港

ところをよく酌んで、その研究の功績を見ねばならぬのである。

未刊の書語辭林香記一卷は、天保十一年五月三日、高倉講堂に於て開筵された講義の筆記であつて、師の晩年五十五歳の時のものである。この講義は雲華院大含講師の勸めにより、その他諸子の需に應じて、「和語々路の用格等略々口述」されたもので、いはゞ聖教の國語學的研究法を簡單に講せられたものである。今繙きつゝある本は、妙玄

寺の藏本で、師の嗣子逢傳が、將丁の本を借得して謄寫したもので、奥書に「故父芳學の遺録なれば……願は子孫此恩光を蒙て學解を發せんことを」と記されてゐる。因みにこの書のみならず、義門の著書講録を今日に傳へた人として嗣子逢傳の功勞も忘れてはならぬのである。

師は開口先づ語學の必要なることを述べて「詞遣ヒノ學ビニツイテ、和語說略圖ニアラハレタル種々ノ活用語氏仁波ノ學問ハ、實ニ小サキコトナレドモ、何レノ道ニモセヨ、漢文和語ノム子ノシキモノヨリ、下俗談日記等ニ至ル迄モ是ヲ外ニスルコト能ハザルトコロ歟ト存ズ」といひ、聽衆の所化に對つて「タトヒ山口菜ハ持チ給ハズトモ、一枚ノ略圖ハ必ズヒログ給ハデハ恐クハ何ゴトモ聞エ難カラン歟」といつて、聽講の用意を告げられて居る。高倉學寮の開關以來、師の如き講義は恐らく未曾有であらう。學位なきこの一僧の口か

ら洩るゝ一語々々の底には何ものも動かし難い自信の力が籠つて居るのである。なみ居る聽衆の所化は一語も洩らさじと耳をそばだてたのである。高倉の學堂にはかつて見たことのない靜肅なる一種の緊張が漲りわたつたことであらう。講者の一語は一語よりも熱して、思はず時の學界に對する鋭い批評さへ交つたのである。

師は語學に秘傳なきことを高調し、當代に於て語辭の學にうとき人々を列擧し、「今時の歌人」はいふも更なり、俳諧家は勿論、都に名高く江戸に響ける國學者和歌者流も、言靈々々ともてはやして秘かに御藏法門の如く傳授だとか秘訣だといつて人目を驚かす流義を極力排斥して居る。而してかの華嚴の鳳潭が、親鸞聖人の和讃は氏仁波も知らぬ和讃と誹つた淺識を笑ひ、「御一宗ニ在テハ、三帖和ハハ申スニ及バズ、御假名聖敎尙又三經ヲ始メ、漢文諸聖敎ノ御延書ノ類、御脇付ケノ御訓

點等、ソノ御麗シキコト源氏古今ナドデ、ヨク讀ミタラン人ナラバ、佛法ハタトヒキラヒノ人デモ、コノ筋ニ於テハ感心スベキコト」を述べ、又或る個處では「和歌者流ノ癖トシテ和讚ナドヲ一寸見

テテにはガ惡イナドトイフ族ノアルノニ口アケサセテ置クトイフハ殘念ナリ」と極力その意底を傾けて講せられて居る。師の研究の動機はこゝに明かに見えるのであつて、師の著山口栞について「通俗ノ書故、御經ニト指シテハナケレドモ、コノ書ヲ著ハストイフモ、何モンノ意ノ止ル處ハ、ナニガナ宗書研究ノ一助トモナレカシト思フガ本意故」といはれてゐるのも、全く同じ意味に歸着するのである。

本書に語辭研究の實例として引く處は多く三帖和讚であつて、その解釋を下すに當つては代々の敕撰集はもとより、國文諸種の物語より仙覺の萬葉抄を引き、塵添瑤囊抄を引き、近くは玉の緒、

古事記傳、玉の小櫛、詞の八衢、など實に該博な引證を示して居る。高倉の學堂で、かやうな講義の開かれた當時の狀況を、今日から想像して見ても盡きぬ感興を覺えるのである。

その中特に注意を惹いたのは橘守部の著鐘の響の名の見えることであつて、六會(第六回講義)に「コノ頃江戸ヨリ出タル鐘ノ響トイフ書ヲ、昨日初テミレバ、上方筋ノ人ハ、餘リ誤ラヌガ、江戸ノ人ハ兎角コ、ヲ誤ルト云フテアリ、爾ルニ江戸人ニハ限ラヌ、京並京近邊ノ先生宗匠、コ、ヲ誤ラヌハ希ナリ」といつてある。鐘の響三卷は天保十年の出版で、宛もこの講義のあつた前年に出たのであるが、義門はこの講義を續行して居る間にこの書物を初めて見たことがこれでわかるのである。「コ、ヲ誤ル」といふのはあしをあし、といひ、うたてきをうたてしきを誤ることを指したのであつて、今別に關係はないが一寸言ひ添へておく。

鐘の響は八會のアザムの活語の下にも、引き合ひに出され、「鐘ノ響ハ本居ノ説ト云ヘバ何ガナ誦ラウト云フ一體ノ僻アル筆ツキユエ」云々と守部の態度を評下してある。

なほこの語辭林香記には他の講録などに於けると同じく、師の他の著書のことゝが數々見える。その中には現に佚して傳はらぬ著書の内容を、ほかに窺ふべきものもある。たとへば「カヘルノ手ヲヒロゲタ様ナニヨツテカヘデトイフ、楓樹トイフモノ」のことはつぶさに月草の中に論じておいたとある。この月草は佚書の一つである。師の國語研究法は、どこまでも國語中心であつて、かの荻生徂徠や太宰純の如き漢字に拘泥した解釋の誤れることを糺彈されたことはいふ迄もない。この書の中にも和語の漢字に當り難いことを繰返し説かれて居る。なほ師の國語研究には時代の觀念を不可缺少したのであつて、言語が時代に隨つて變

化し變遷を経ることを力説した。眞宗の聖敎にしても、宗祖のもの、覺存二師のもの、蓮師のものどその間に時代の推移あることを見、聖敎の解釋を一本調子で試みてはならぬことを嚴格に述べられて居る。

語辭林香記を繙きつゝあれば、いふべきことは盡きない。何れも聖敎解釋の指針として看過すべからざるものである。然しもう結語に急がねばならぬ。この講義は前後十回に亙り、第一回と第十回とは講堂に於て開かれ、その他は貫練堂で講せられたやうである。而して第三回に當つて「明日ハ端午ナレド無餘日ニ付」とあつて講義を急がれて居る。毎日續講されたものとすれば五月三日に始まつて、同十二日に完了したことになる。この講義は僅々十回で終つて居るけれども、師の蘊奥を傾倒されたのであらうから、師の語學の概要を窺ふに足るのであつて、一般的なのであるが、

それだけ平易に要を盡したものだといはねばならぬ。

最後にいふべきことは師は決して單なる一學究の徒ではなかつた。御文一帖目第十五通講義を見ても、「上來文々句々ノ辯ハサラナリ、一宗ノ緊要タル御安心ノコトサヘモ略シテ通リタレドモ、御宗名ノ義ハ繁キヲ厭ハズシテソノ慷慨悲憤ノ哀情ヲ繰カヘシ〜述ベタルナリ」といはれてゐる如く、内心に燃ゆるが如き熱情が包まれてゐたのである。師が藩主に乞ふて自ら一向宗の名を改め、自後藩内に於て淨土眞宗の名を行はしめし事蹟とあはせ見て、滿腔の熱情は逆つて實行となつて現はれたのである。表面極めて冷かなるが如き語學音韻學の研究も、師に於ては既に出發の動機が單なる學問のための學問でなかつたことは前に述べた如くである。師の胸臆には絶えず宗學傳燈者としての血潮が流れてゐたのである。師の宗學は、

宗内のみに通用するが如き狭い學ではなかつた。その科學的研究の精神は終にわが語學界の一大權威となるまで徹底したのである。一大谷派の義門ではなく、日本の義門となつたのである。然しわが大谷大學としては、單に語學者としての義門ではなく、吾々の先哲として、眞宗聖教の解釋に畢生の力を献げた義門として永久に忘れてはならぬのである。その科學的精神は大にしては明治時代の先驅として、小にしてはわが大學の精神として永遠に傳へねばならぬのである。

編輯日誌

橋川 正

●●●
無盡燈の後身として發刊すべき研究雜誌は最初『眞宗學報』といふ題名であつた。四月に創刊號を出すといふので、甚だ突嗟の思ひつきであるが、東條義門師に關して特に二三十頁を献げたいと思つたので早速その準備にまじりかゝつた。時は既に二月の初旬であ